

通信などで多用しがちな「頑張ろう」という言葉。安易に使ってしまったら、文章が上っ調子になる危険性があります。今回は、常套句に頼りすぎず、使うべき言葉を十分に吟味することの大切さについて、辰濃先生にまとめていただきました。

## 「頑張ろうを連発せずとも」

昔々のことだ。新聞社の特派員としてニューヨーク市に在任していたころ、息子を公立の小学校だけではなく、日本人学校（日曜だけ）にも行かせていた。

その日本人学校で運動会があった。来賓のアメリカ人が「皆さん、今日はおおいにエンジョイしましょう」と笑顔で挨拶した。続いて現れた日本人の役員は堅苦しい調子で「お客様の前で恥ずかしくないよう頑張りましたよ」といった。

スポーツを「エンジョイする文化」とスポーツで「頑張る文化」と、二つの文化の違いを感じて苦笑したことを覚えている。

スポーツの世界ではひところ「エンジョイ」という言葉を軽んずる風潮があった。最近、「楽しむ心をもてば肩の力が抜け、肩の力が抜ければ実力がだせる」という意見が出てきたのは悪いことではないと思うが、それはさておき、ここでは、「頑張る」という言葉の多用について書きたい。

学校新聞、学級新聞では、先生や小、中学生たちの文章に「頑張る」という言葉がめだつて多くでてくる記事がある。

わずか四百字の中に「頑張りました」「頑張った」など「頑張る」という言葉が四回もでてきた例がある。

全般に「頑張ることに意味がある」「頑張ろう」「必死に頑張つて」「頑張りました」「頑張つて乗り越えたい」がめだち、とくに運動会の際の記事では、頻度をます。「頑張る」こと自体が悪いなどとは思っていない。

頑張るのはいい。しかし、学校、学級新聞に「頑張る」の文字がこれほどまでに飛んだり跳ねたりしているとは思わなかった。

「頑張る」という常套句に寄りかかりすぎていると、文章は上っ調子になる。あれこれ書いてきて、終わりに「さあ、頑張ろう」と書けばかつこうがつくと思う心根に、そういつてはなんだが、やや安易さがあるのではないか。使うべき言葉を十分に吟味するのは、

難しいけれども必要なことだろう。

テレビで、料理を口にした出演者の多くは約束ごとのように「おいしい」という。いかにも心の伴わない「おいしい」もある。だから「これは好みじゃない」「素材の組み合わせが悪い」といえばおもしろいのだが、味に異をとなえる場合はごく少ない。

「頑張ろう」「おいしい」だけではない。「感動する」「美しい」という言葉も、ずいぶん安易に使われているように思う。

私自身は、「頑張る」「感動する」「美しい」という言葉は不用意に使いたくないと思つている。たとえば「美しい」という言葉に総論的な意味があり、どこがどう美しいのかを具体的に書いてこそ、各論の中身が読み手に伝わるのではないだろうか。

「頑張ろう」にだって、多様で具体的な言い換えの言葉があつていいし、「頑張らずに楽しもうよ」という主張があつてもいい。



●たつの・かずお  
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。